

『長安春望』 盧 綸

乱世には武、治世には文

長安春望 盧 綸

長安春望

盧 綸

東風吹雨過青山

東風雨を吹いて青山を過ぐ

却望千門草色閑

却つて千門を望めば草色閑なり

家在夢中何日到

家は夢中に在つて何れの日か到らん

春來江上幾人還

春は江上に來りて幾人が還る

川原繚繞浮雲外

川原繚繞す浮雲の外

宮闕參差落照間

宮闕參差たり落照の間

誰念為儒逢世難

誰か念わん儒と為りて世難に逢い

獨將衰鬢客秦關

ひとり衰鬢を將て秦關に客たらんとは

【字 解】

東風 春風。

青山 青い山並み。

却 ふりかえる。

千門 宮殿の門。

江上 川のほとり。

川原 川の流れ。ここでは渭水を指す。

繚繞 川などがくねくねと湾曲したさま。

宮闕 宮殿の門。

参差 並び連なるさま。

落照 夕陽の光。

誰念 誰も思わない。(反語)

世難 乱世。

衰鬢 年をとって色つやのうすくなった耳わきの毛。

秦関 関中の地。函谷関。

【意解】

都では春風が雨に吹きつけて、青い山並みを過ぎ、振り返り、多くの宮門あたりを見れば、若草ものどかである。

故郷の都は夢にばかり現れ、いつ帰ることができよう。春が川のほとりに生ずる季節だというのに、どれだけの人が帰京できるのか。渭水は、浮雲の遙か彼方へ曲がりながら続き、並び続く宮殿の門は夕日の光の中でその威容を誇っている。

役人となって、乱世に遭遇し、ひとり都から離れたこの函谷関で、やつれた旅人として暮らしていることを誰が思ったであろう。

【鑑賞】

都長安から離れ、おそらく函谷関以東より長安を思っている感慨であろう。「千門」「宮闕」といった言葉が連想される華やかな都の様子と、現在の自分を対比させている。彩りゆたかな春の訪れは、それにふさわしい境遇の者には好時節に映るが、そうでない者には、落胆をいやすばかりである。七句目の「世難」とは安史の大乱後の混乱を言い繰り返される吐蕃(チベット)の侵入などを言うのである。治世には文をたつとび、乱世には武をたつとぶと言う。「儒者」は文人であり、乱世に役に立たぬ自分を嘆いているのである。

唐代の都長安

「大道長安に通ず」などとも称されるように、世界最大の国際都市であった。人口は約百万、ただし最少節では五、六十万、最大の節では百七十万に達し、現在のところ確定しがたい。盛唐韓愈と賈島はともに「長安百万の家」と歌った。「門を出づ」「山を望む」

都城のにぎわいぶりは、初唐の盧照鄰「長安古意」の中でこう詠まれる。「長安の大道狭斜に連なり、青牛、百馬、七香車(七種の香木を用いた、女性用の豪華な車)」と。また晩唐の韋莊は長安二月香塵多く六街の車馬声隣し春

爛漫たる二月（旧暦）、長安の都には、芳しい土ぼこりが舞いたち、六条の都大路を走る車馬の音は、りんりんと高らかにひびく。―と歌った。

唐長安城

唐の長安城（京師城）は隋の都「大興城」をそのまま継承・発展させたものである。城内の中央北端部に、天子の住む「宮城」を置き、その南に「皇城」（宮庁街）を設けた。この皇城の中央部を南北に貫く「天門街」と接続する形で、外郭の南正門「明德門」に向かう幅一五〇メートルの朱雀大街が都城内を南北に貫いていた。繁華な商業センター「東市」と「西市」も、この左右に均等に配置された。方形をなす都城は、南北約八・七キロ、東西約九・七キロに達し平城京や平安京の三、四倍の大きさである。

〔作者略伝〕

盧綸 七四八―八〇〇？

中唐の詩人。字は允言。河中蒲（山西省永濟県）の人。大暦年間（七六六―七七九）、しばしば進士の試に応じて及第しなかったが、宰相元載に才能を認められて拔擢され、のち検校戸郎中、監察御史に至った。大暦の十才子の一人に数えられる。明人の手になる「盧綸集」がある。

【参 考】

大暦十才子

中唐、代宗の大暦年間（七六五―七七九）に活躍した十人の詩人を総称したものの。大暦からあまり時を隔てぬ時期に妖合が編んだ唐詩の詞葉集「極玄集」巻五、および「新唐書」「盧綸傳」の記載によると十才子とは、錢起・盧綸・吉中孚・韓翃・司空曙・苗發・崔峒・耿湋・夏侯審・李端のことである。

もっとも後世になると、詩人が伝える作品の量、あるいは当人の主観的評価によって、詩人の一部を入れ替えることも起った。例えば、清、簡世銘の「詠雪山房唐詩鈔」では吉中孚・苗發・崔峒・耿湋・夏侯審の五人を除いて、代わりに劉長卿・郎士元・皇甫冉・李嘉祐・李益を加えている。安史の乱（七五五―七六三）の平定によって得られた小康状態の中で、大暦十才子たちは好んで貴顕の門に出入りした。そして彼等の主催する会席において、端正な五言律詩の詩型を用いて、送別詩や唱和詩の方面に洗練された儀礼的な詩を作った。この意味で、彼等の文学は、宮廷貴族の生活を文飾する一種の宮廷文学であった。李白や杜甫に代表される盛唐期の高揚した気魄は影を潜め、また続く中唐後半期へも持たない。このため従来の評価は低かったが、近年、その独自の地位が再評価されつつある。

